

「朝日ジャーナル」創刊50年怒りの復活号「週刊朝日」緊急増刊号を読む

昨年末、ジャーナリストの筑紫哲也さんが亡くなった。筑紫さんに対するイメージは十人十色だろうが、私には「朝日ジャーナル編集長」

と、肩書きがなじみ深い。今から約25年前、暗い浪人生活を経て大学に入学した私は、大学生の必読雑誌と言われた「朝日ジャーナル」を右手に抱え、左手に「ブックバンド」でまとめた教科書とノートを持って大学に通った。そんなある日、政治関係サークル主催の講演会に筑紫哲也氏がやってきた。

初めて見た筑紫氏は、当時流行の「紺ブレ」(紺のブレザー)に、ブルージーンズ、靴は黒のコインローファー、髪型は真ん中分けのやや長髪で、「ナンパ学生」という風貌だった。カジュアルとフォーマルを半分ずつにしたような不思議な服装だった。講演の内容はよく覚えていないが、安定した口調と鋭いまなざし、一見、自由な雰

『余暇学研究』第13号投稿募集要領

『余暇学研究』第13号の投稿を募集します。投稿予定者は、同封の『余暇学研究』第12号巻末に掲載している「余暇学研究投稿規定」をよくお読みいただき、以下の要領に従って投稿ください。

なお、本年度はエントリー締め切りおよび原稿締め切りが共に、早くなっていますのでご注意ください。

- 投稿資格 原則として日本余暇学会会員に限る。詳細は「投稿規定」参照のこと。
- 投稿原稿の種類 「論文」「研究ノート」「その他」の3種とする。字数も含めて詳細は、「投稿規定」を参照のこと。
- エントリー方法 投稿希望者は、事前に学会事務局までエントリーしていただきます。

- ・エントリー締切：平成21年7月31日(金)
 - ・エントリー方法：氏名、所属、住所、電話(FAX)、電子メールアドレス、原稿の種類(論文、研究ノート、その他)、タイトルを記し、下記の学会事務局宛に電子メールを送信する。郵送、FAXは受け付けられないので注意のこと。
- *エントリーされた投稿予定者には、投稿規定、執筆要領(執筆見本付)を送付します。規定類を遵守し、投稿してください。

■原稿締切 平成21年9月30日(水)とする。発行は、平成22年3月末を予定。

■査読について 投稿された原稿のうち、論文及び研究ノートは編集委員会が選任する査読委員の査読を受けるものとします。査読結果により、原稿の修正等を求める場合があります。

■採否 投稿原稿の採否は編集委員会で決定します(「投稿規定」による)。

◎エントリー先：日本余暇学会事務局 Email: info@yokagakkai.jp 投稿募集に関するご質問もこちらにお願いします。平成21年3月31日 日本余暇学会余暇学研究編集委員会

用、貧困などを論じる場ではなかった。それゆえど、よりサラリーマン生活に浸かった私にとってリアルさがなく、大学とともに『朝日ジャーナル』を風を便りで聞いた(九二年五月)。今回の『朝日ジャーナル』創刊50年怒りの復活号に、そのような時代を生きた「元若者」の「同窓会」の場を期待した読者は、肩すかしをくらったのではないか。目次には今日の「社会病理」が並び、「同窓会」は脇に追いやられていた。復活ジャーナルは「冷戦」「沖縄」「九条」などがテーマでなく、「貧困」「格差」「政治の劣化」がメインテーマだ。まさに「終わり無き日常」がテーマなのである。この変わり果てた『朝日ジャーナル』創刊50年号を読んで、「終わり無き日常」を生きたる決意をした。(山田)

日本余暇学会ニュース

時代の転換期に「余暇」の前進を！

第66号

日本余暇学会事務局 〒191-0016 日野市神明1-13-1 実践女子短期大学 生活福祉学科園田研究室内 Tel/FAX 042-584-5428 e-mail info@yokagakkai.jp Home Page http://www.yokagakkai.jp/

時代はどうかやたら大きな曲がり角にきているようだ。アメリカに端を発する経済危機の中、これまでの競争的な社会運営に対する真剣な批判が生まれている。夏には政権の交代もあり得る状況の下、物事の優先順位の見直しが進むであろう。この十年ほど後退を余儀なくされた「余暇問題」についても新たな前進が期待される。

東京地方の隔年開催の慣例に従って東京で開催することとし、さらに中村理事(九州)の提案を受け、観光関連学会と協力し、「観光と余暇」をテーマにした共同の学会大会という、これまでにない試みに挑戦することとした。不況の中でも観光光事業は伸びを見せているし、昨年は観光庁が設置され、大学の観光系学科の新設も目立っている。観光が余暇問題の中でも重要な位置を占めることは言うまでもない。

では成果が出ていない。そこで昨年のカルチュラル・スタディーズ論議を生かして、イギリスなどで活発に展開されているレジヤ・スタディーズの成果や方法論を取り入れ、日本の現実と切り結ぶ学術的な余暇研究書を刊行すべくプロジェクトをスタートさせた。担当理事は杉座氏、プロジェクト担当幹事として最近、ポピュラー音楽の研究書や翻訳活動で活躍している宮入恭平氏を任命、さらに研究誌編集委員の加藤裕康氏はじめ若手研究者に参画してもらうこととなった。合わせて海外の重要な余暇研究書の翻訳も念頭において検討を進めて行く。この課題に関心のある会員はぜひ事務局へ一報いただきたい。

●観光系学会との共同研究大会

昨年十月に宮城県で開かれた12回大会は「カルチュラル・スタディーズ」という清新なテーマを掲げ、今後の余暇研究の方向を展望した深みのある論議が出来た。ただ、会員の少ない東北で開催し、十分な参加者を集められなかったことは残念であった。そこで今年の13回大会は、

期日：二〇〇九年九月二十六日(土)～二十七日(日)



「合同学会」や学会編研究書発行を目指す

●日本余暇学会編集による研究書

日本余暇学会はこれまで三冊の学会編の書籍を刊行しているが、二〇〇四年は

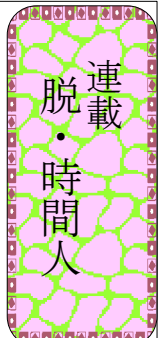
推進し、学会の発言力、影響力の強化に努めたい

と、まことに残念であった。そこで今年の13回大会は、

をさらに充実させて、学会誌にふさわしい論文を集めたい。年四回のニュースも出来るだけ多くの会員が執筆できるように働きか

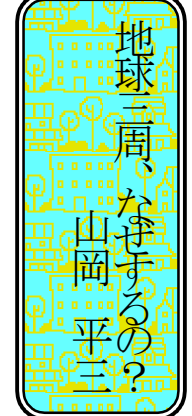
お詫び・訂正

65号に掲載しました記事「第10回世界レジヤ会議報告」p.3の中の項目「第11回ワールドレジヤ総会概要」は「韓国・ワールドレジヤ総会および競技大会組織委員会」のホームペー



連載 脱・時間人

私は、NGO団体が企画するピースボートの地球一周の船旅に三回参加した。時期は、退職後の平成十三年春、十六年秋、十九年夏である。それぞれ約百日をかけて、世界の約二十の寄港地を訪問したのである。



地球一周、なにするの？

友人からは「なぜ、三周もするのか？」と聞かれるが、理由は単純で「好奇心と探究心」である。毎回、航路が異なるから、地球の北と中央と南の三回、オーバーに言えば、人間の居住している地域を総なめした事になる。

乗船者は一回目は六百人ほどであったが、二回目からは船が大型化して九百人ほどで、外国人も数十名乗っていた。乗船者の出身地は北海道から沖縄まで、年令的には、十代二十代が約四割、六十代以上が四割、あと一割りが中間年代である。約九割が単身で、カップル組は一割程度。男女比は四対六位で女性が多い。これらの乗船者は、ノビリ組もいるが個性豊かな人が多く、自主企画と称するサークルが次々と立ち上がり、あたかも大学のサークル活動の様相で一航海中に幾十も出来る。私は旅行記サークル

を立ち上げ船内生活を楽しんだ。帰国後は毎回旅行記を自主出版し、自著一冊・共著二冊を世に出した。数百人の知人友人に「長い手紙です」と送り状をつけて発送した。私の旅行コンセプトは、観光旅行よりも「見聞感考旅行」である。観光の語源は「国の光を観る」と言われているが、私は光があれば影もあるはずだと考えて、その両者の現場を「見て・聞いて・感じて・考える」事に主眼を置いている。



筆者とマサイの青年

会費納入のお願い

平成21年度会費の納入をよろしくお願いいたします。

口座番号: 00140-9-729065

加入者名: 日本余暇学会

会費: 一般会員10,000円 学生会員5,000円

*新しい学会パスポートができました。

余暇に関心のある方へ入会をお勧めください。

「今や万人が余暇自由を手にした」。一九六〇〜一九七〇年代、デモス・ダイエラ余暇学の先駆者たちは「余暇社会」の到来をこう論じた。ではその後、余暇学はどのような展開を見せたのか。レジャー・スタディーズ協会(USA、一九七五年設立)を一拠点に新たな成果をもたらしたイギリスの研究動向は、今から振り返るとこの命題への問題提起から出発したと見ることが出来る。

そうした純粋な自由時間などあるのか。女性の余暇は男性のケースに比して、収入・家事労働の配分・社会規範・レジャー供給などの面で負の質的差異を伴うことを指摘したのである(Deerl「一九八二」Green「一九九〇」)。また異なる階級間でも、一般に中産階級のほうが労働者階級よりも余暇活動への参加率が高く、レジャー消費も盛んであるなど余暇経験の差異が指摘され、それは主に収入面の違いによることが示された(Sea Brook「一九八八」、Sturgis「二〇〇三」)。さらにエス・ニシイの面でも、たとえば白人女性と黒人・アジア系女性との間で異なる余暇経験や多くの障壁が指摘された(Parnal「一九八九」)。このように「差異」の告発のほかに、一九八〇年代のイギリスでは、失業者三百万人・失業率10%超という現実が、失業と

イギリスレジャースタディーズ研究動向

小澤考人

余暇の関係をめぐる問題を提起した。「強いられた余暇」ヒマとしての失業は当事者も余暇とは感じないこと、その理由として収入をはじめ労働の全対価(地位・社会的接点・生活リズムなど)を喪失している点が指摘されたのである(Thendry「一九八四」、Roberts「二〇〇六」)。以上の新しい問題提起は、いずれも「万人が等しく余暇をもてない」現実の一端を露し、異なる他者の間で不均等に生かされる余暇の「差異」と視点を向けるとともに、「余暇」という時間概念に隠された(労働の対価に伴う)価値や資源の側面を逆照射したといえよう。

第二の点は、余暇自由という前提から新たな研究が生まれた。この前提の相対化/脱中心化という点で、一貫した問題提起を行ってきたのがロジャスである。余暇を行為

の局面に還元するかぎり自由の側面が見出されるが、当の行為が条件づけられる場合たとえば資本主義社会の力学的布置などを問題化し(Rojek「一九八五」)、余暇を社会的文脈におき直して考察すべきことを主張する(同「二〇〇一」Jill「二〇〇五」)。クラーク&クリッチャーの論考もまた、余暇を社会的文脈の中に位置づけながら、多様な社会的分割のもとで人々が余暇を自由に生かす/消費するまさにそのただ中で、資本主義社会のヘゲモニーを再生産する構造を暴き出している(Clarke&Critchler「一九八五」)。以上の研究は、余暇自由という前提に対して、その条件としての社会性の場へ視座を転回する点で重要な意味をもつ。実際、余暇の政治学というべき問題圏が開かれてくるが、比較レジャー分析の問題提起を経て(Wilson「一九八

きで、多様なイベントがあり、その内容は、娯乐的なものから語学・政治経済・文化と言った教養的なものがあるし、次の寄港地のNGOが前の寄港地から乗船して国際交流やレクチャーもある。

乗船者は一回目は六百人ほどであったが、二回目からは船が大型化して九百人ほどで、外国人も数十名乗っていた。乗船者の出身地は北海道から沖縄まで、年令的には、十代二十代が約四割、六十代以上が四割、あと一割りが中間年代である。約九割が単身で、カップル組は一割程度。男女比は四対六位で女性が多い。これらの乗船者は、ノビリ組もいるが個性豊かな人が多く、自主企画と称するサークルが次々と立ち上がり、あたかも大学のサークル活動の様相で一航海中に幾十も出来る。私は旅行記サークル

を立ち上げ船内生活を楽しんだ。帰国後は毎回旅行記を自主出版し、自著一冊・共著二冊を世に出した。数百人の知人友人に「長い手紙です」と送り状をつけて発送した。私の旅行コンセプトは、観光旅行よりも「見聞感考旅行」である。観光の語源は「国の光を観る」と言われているが、私は光があれば影もあるはずだと考えて、その両者の現場を「見て・聞いて・感じて・考える」事に主眼を置いている。

このような状況からして、現実世界は既に「隣の国は、隣の家」のように緊密になって来ている。この事には人々は無関心であったとしても、無関係ではないのだ。最近、私の手元に「余暇学研究・第十二号」が届いた。その七三頁から「カルチマル・スタディーズとは何か」と題して、本橋氏の講演記録が掲載されている。読むほどに、私の頭は熱くなって来た。それは過去三回の航海で見聞感考した旅の現場が想起され、先住民やNGOとの交流体験が生々しく脳内を占領し始めたからである。

一例をあげれば、中米のある寄港地で古い強固な要塞跡があった。私は「これはスペイン人が造ったのか」と聞くと、その場にいたNGO関係者は、即座に「あ、それは、我々の先祖が重い石を一つ一つ積み上げて造ったのだ」と答えた。昔は支配者のスペイン人

のものだったが、現在は我々の歴史遺産だと強調した。私の見聞感考旅行は、少しはカルチマル・スタディーズの現場検証かとも思った。さて、地球一周の民間団体旅行の始まりは日本では、明治四十一年に朝日新聞社が催行した「世界一周旅行会」だそうだが、それから数えると昨年の平成二十年で丁度百年となる。一世紀を区切りに、日本の旅行文化を探るのも意味のある課題だと考える今日この頃である。

第56回 日本余暇学会理事会議事録

日時: 平成21年4月18日(土)

出席者: 藪田会長、中藤副会長、有馬、高橋、辰巳、山田、師岡各理事、下島、宮入会員

I 2009年度目標について

II 2009年度 事業計画 (2008年度の総括を踏まえて)

1. 第13回 研究大会計画
2. 『余暇学研究第13号』編集、発行
3. ニュースレターについて
4. 日本余暇学会編集による研究書の企画
5. 地域ブロックにおける研究会開催
6. 会員拡大について
7. ホームページの活用、充実
8. 理事改選の方向と幹事任命
新年度幹事下島会員(大会担当)、宮入会員(研究書出版担当)を任命。
9. 会計報告と予算案

III. その他